

アフオーダンス調査

0717035 小林晃子

はじめに

大学に入り、授業内で聞きなれない単語を耳にするという機会は数多くありますが、その時記憶に留めていても、性格上後々になって忘れてしまうこともあります。最悪、思い出せないということも。

今回のテーマである「アフォーダンス」についても、最初は授業の一端として聞いて以来すっかり頭から抜けていたのが、最近になってふと思い出したことを理由に、思い立ったが吉日とばかりに「では調査をしてみよう」となった次第です。

アフォーダンスとはなにか？

「与える、提供する」という意味の英語、ア
フォード (afford) から、アメリカの心理学者の
ジェームス・ギブソンが 1950 年代後半に
作った造語。

その定義は、物体の持つ属性が、物体自身をど
う取扱ったら良いかについてのメッセージを
ユーザに対して発している、とする考えであ
る。例えば椅子であれば「座る」、水であれば
「飲む」「溶かす」などが、これらが持つア
フォーダンスにあたる。

アフォーダンスの分類①

様々な場所でアフォーダンスを探しているなかで、アフォーダンスは何種類ものかたちをとって私たちの生活に溶け込んでいることを窺うことができた。

前頁のアフォーダンスの説明の際にアフォーダンスとは物体に限ったような書き方をしてしまったが、アフォーダンスは物体だけでなく、季節や時間、場所のような、質量を伴わないものからも発せられている。というよりも、私たちの周りに存在する全てにアフォーダンスは無限に存在し、そして人によって千差万別の捉え方がある。

よって全てを挙げることは不可能に近く、その為次頁からは「私」が認識することの出来た範囲でのアフォーダンスの種類を紹介していきたい。

アフオーダンスの分類②

～色によるアフオーダンス～



写真上：マンションそばの大型
車両駐車スペース（緑の地
面）



写真下：歩行者専用通路（右
側薄緑部分）

アフォーダンスの分類③

～絵・文字によるアフォーダンス～



写真上：各車線中央部の絵

写真下：一時停止を促す文字



反対車線の車と接触や、飛び出し頭出会い頭の衝突を避けるといった「危険回避」を認識させる。



アフォーダンスの分類④

～形によるアフォーダンス～



写真：道の一角に設けられた
駐車スペース



周囲と異なった形の箇所を作る
ことによる誘導。

アフオーダンスの分類⑤



～人によるアフオーダンス～

写真上：店内での商品説明

写真下：会計待ちの様子



上の写真のように、店員が居ることによって、客は店内で「商品の説明を受ける」という選択肢を得る。

アフオーダンスの分類⑥

～素材によるアフオーダンス
～



写真：タオルの陳列風景



タオルのみならず、柔らかであったり
艶やかな布地や毛並みで出来た
製品に関しては、大勢の人々が
「触る」「撫でる」といった行動を
起こしたのが確認出来た。

アフォーダンスの分類⑦

～光によるアフォーダンス～



写真：地下から地上へ繋がる
階段



地上から漏れた光によって、地下を
通る人が階段の先が外に繋がっ
ていると認識し、

結果、移動にかかる時間や距離の
短縮に繋がることが予想される。

アフォーダンスの分類⑧



～特定の場所によるアフォーダンス～

写真上：波打ち際に近づく女性

写真下：旅行先のミュージアムでの写真



普段馴染みの無い場所に身が置かれた時、人は普段とは異なった行動を起こしやすい。旅行先で写真を撮る行為など、その典型例ではないだろうか。



アフォーダンスの分類⑨



～建物によるアフォーダンス
～

写真上：階段下の物置スペース



写真下：雨宿りをする人

アフオーダンスの分類⑩



～シンボルの存在によるアフオーダンス～

写真上：新宿ALTAスタジオ前

写真下：地元（板橋区）文化会館前



大きく目立つ存在や、認知度の高い存在は人々の目印になりやすく、待ち合わせの場所などに用いられやすい性質がある。

類似例）→ 駅、公園など



場所によるアフォーダンスの違いはあるのか

今回のアフォーダンス調査では、主に住宅街と繁華街の観察と撮影を行った。二つの種類に分けられるこれらの場所では、似たような施設であっても、利用する人の行動に多少の違いが見られた。

例えば駅の入り口の階段を挙げてみる。通常、階段のアフォーダンスでは「昇降する」が一番先に浮かぶと思われる。住宅街付近の駅では朝から夜にかけて、まさにこのアフォーダンスに沿って行動する人が殆どだったが、繁華街付近の駅では朝の通勤・通学時間を過ぎた頃から、階段に座り込み、相手と話したり本を読んだりする人が多く見られるようになった。同じ「階段」という場所でありながら、なぜ前者と後者にはこのような異なる点が発生したのだろう。以下、三つの点から考察を試みた。

- (1) 場所
- (2) 階段の規模
- (3) 周囲の状況

(1) に関しては、場所の関係からまず駅を取り巻く人の数が大幅に異なる。都心の大きな駅では日々万単位で人が行き来しているので、雑踏の中に在って人は自分自身の存在感に若干の稀薄さを感じるかもしれない。

(2) では両者とも幅の広い階段ではあるが、前者が十段にも満たない段数に対し、後者はその倍以上の段数があった。

(3) 前者は階段と真向かい側の近い場所に、青果店や日用雑貨店のような、いわゆる商店街に見られる外側にオープンなタイプの店舗が階段と向かい合う形で並び、常に誰かしらの視線が階段側に注がれている様子だった。一方後者も、階段と向かい合って何店かの店舗が並んでいたが、こちらは

階段と距離がだいぶあり、店自体も内向きに作られてる為、意識して見ない限りは内側に人の視線が階段に向けられることは少ないように思われた。

以上に記したことから、「他者との紛れ込み具合」「段数の違いによる座る場所の選択幅の増加」「周囲からの視線」の三点が、同じ「階段」という環境でありながら異なったアフォーダンスを生み出す要因となったと考える。

また、どれだけ他者が自分自身と同じ行為をしているかによっても、アフォーダンスは異なってくるのかもしれない。

多数派よりも少数派の意見が目立つことがあるように、一人だけが階段に腰掛けている光景は人の注目を集めやすい。しかしそれが複数人となれば、「みんながやっている」行為として周囲からは当たり前となり、連動して、定番化したアフォーダンスになりえる可能性も充分考えられるのではないだろうか。

アフオーダンス～住宅街～



アフオーダンス～繁華街～



最後に

調査中は此れ（此处）にはどんなアフォーダンスがあるのかと意識する時間が長かったせいか、以前より「もの」に対して注意して見たり触れたりする機会が多くなったように感じます。

それによって今まで見落としていた部分が不意に発見出来ることがあったり、正しい正しくないを抜きにして自分なりに推測する部分が増えたりと、身の回りには何気なく多くの「新しいこと」が潜んでいることを実感します。

いつもはサッサと歩いていってしまう道でも少し注意して見てみると、そんな新しい何かが見つかるかもしれません。